

歌枕

西行や宗祇、芭蕉など、歌枕は詩神のごとく、偉大な旅の詩人たちを誘い、数々の詩歌をのこさせている。一方歌枕の成立は、旅せぬ人も旅情を味わうことができるという、文芸の世界の出現でもあった。それは万葉集以来の歌に詠みつがれた地名が、長い間に日本人共通の情緒的イメージを醸成するにいたったからである。

奥村恒哉

奥村恒哉（おくむらつねや）1927年生。京都
大学文学部卒業。専攻、平安時代文学。主著
『古今集後撰集の諸問題』。

平凡社選書52

歌 枕

1977年4月11日 初版第1刷発行

著 者 奥村恒哉
発行者 下中邦彦
発行所 株式会社 平凡社
東京都千代田区四番町4番地1
郵便番号 102 振替 東京 8-29639
電話 東京 (03)-265-0451

印 刷 東洋印刷株式会社
製 本 株式会社石津製本所

© 奥村恒哉 1977 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

不良本のお取替えは直接小社サービス課まで
お送り下さい。（送料は小社で負担します）

歌 枕

奥村恒哉

平凡社

目 次

序章	日本文学と歌枕	9
----	---------	---

I 歌枕の世界

第一章	歌枕の範圍 名所ヲトルニ故実アリ	18
第二章	歌枕の禁忌 只根源歌のはばかりあれば也	29
第三章	歌枕の起源 いづれの社頭もよむべし	37
第四章	歌枕の意味 いづれの国と才覚はおぼえて用なし	43
第五章	歌枕と散文 源氏見さる歌詠みは遺恨の事なり	49
第六章	歌枕の創出 ことばはふるきを、心はあたらしきを	56
第七章	架空の歌枕 今深草に霞の谷と聞ゆる所あれど	64

II 歌枕の種々相

第一章	みなせかは	76
-----	-------	----

普通名詞から固有名詞となった歌枕

第二章	をだえのはし……………	82
	『万葉集』の誤読から生じた歌枕	
第三章	やまぶきのせ……………	96
	『万葉集』の難訓から生じた歌枕	
第四章	にへののいけ……………	115
	地形的に消失してしまった歌枕	
第五章	すみのえとすみよし……………	135
	一般に同義とされる両歌枕の併存の根拠	
第六章	うぢかは・うぢやま……………	156
	鳳凰堂の壁画にみる倭絵と歌枕	
第七章	まきのしま・たちばなのこじま・うめのしま……………	174
	宇治川小島への文学的地理考	
付 章	やまさき付近……………	186
	『土佐日記』難解個所の地名考の解説	

Ⅲ 『源氏物語』と歌枕

第一章 『源氏物語』における「小野」の位置……………

第二章 『源氏物語』地理考証——京都から宇治へ……………

出発——大和大路 こはたのやま こはたより宇治へ

ひつかはの橋 まぎのをやま をちなる里

第三章 宇治十帖の風土……………

八宮の邸 をちの里 右のおほい殿しり給ふ所 山の岩屋

宇治山の聖と恵心僧都 はしひめ まぎのをやま かげろふの石

あとがき……………

歌

枕

序 章 日本文学と歌枕

「旅」ということばは、『万葉集』では「草枕」という枕詞をとって登場してくる。

家にあれば筥けに盛る飯いを草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

一四二

文字どおり野宿を意味するそんな枕詞をともなうてあらわれる旅は、さだめし苦しかったにちがいない。その旅は、しかし神話の時代から人間の歴史を貫きつつ、人と人との交流、時代時代の文化と深くかかわっていた。漠と往来したという筑紫の豪族を考えてみても、それは明らかなことである。八咫鏡も五十鈴川の川上に落ちつくまでには、漂泊の時間を持っている。

万葉の時代、すなわち律令国家の道を歩みはじめた時代において、旅は急速にふえていく。地方官の任命等で、国々へ赴く官人は家族たちをふくめて移動する。彼らの生活と旅は結びついていっ

た。防人として、遣唐使の一行に加わって等々、『万葉集』に顔をだす旅は、だが苦難にみちているからといって、人の心を曇らせきってしまったとは思えない。

引馬野ひくまのにはふ榛原はりはら入り乱れ衣にははせ旅のしるしに

五七

草枕旅行く人も行き触ればにはひぬべくも咲ける萩かも

一五三二

ここには現代の旅情すらもうかがわれるのである。

平安時代になると、勅撰和歌集に「羈旅」の部が特設されることになる。その内容は公務——地方官の赴任等——が当然多いが、湯治や宗教的理由による廻国などもある。目的はいろいろだが、羈旅の名で一括されていることは、重視してよいであろう。

地方官の往来に即していえば、『土佐日記』『更級日記』のごとき紀行文が登場した。また、長谷寺や石山寺への物語で『枕草子』や『源氏物語』に見える。それは熱烈な宗教的行為というより、当時としては安心してできる旅行の手段であるとすら思える。しかし、宗教的行為が生活そのものの中に切実にあった時代を考えるなら、旅はそれをもふくめて生活と切りはなされていたのではない。もちろん、個々人の旅の機会は現代よりはるかに少ないが、それはなくて済ませられるということではない。王朝の社会的宗教的生活の中で、男性も女性も旅から離れてはいなかったのである。

和歌や散文の文学が中央集権的国家の安定した軌道に沿って創作され、発展してくると、和歌にうたわれる旅の土地がある意味で固定していったことは特筆に値する。それはやがて、日本文学のみが持つ独得な内容を持った特定の地名——歌枕へと昇華するにいたる。歌枕は歌学書の中で大きな位置を占め、その数は二千に達するが、このことは歌枕が旅にともなう文化となったことを意味するだろう。西行をはじめ時代は隔たるが宗祇さらに近世の芭蕉など、歌枕は詩神のごとく、偉大な旅の詩人たちを誘い、数々の詩歌をのこさせている。

一方、歌枕の成立は、旅せぬ人も旅情を味わうことができるという、文芸の世界の出現でもあった。それは歌枕といわれる地名が、『万葉集』以来の数々の歌に詠みつがれて、長い間に日本人一般にとって共通の情緒的イメージを醸成するにいたったからである。歌枕がいかにも日本人の心になで根をおろしていたか、その端麗な姿を、われわれは「道行文」においてしることができると。

その例は多いが、ここでは中世の『太平記』を引こう。卷二の「俊基朝臣 再フタタビ関東下向ノ事」である。後醍醐天皇の鎌倉幕府征討のことを謀ったというので、日野俊基は鎌倉へ護送されることとなった。「路次ニテ失ル、カ鎌倉ニテ斬キル、カ、一ノ間ヲバ離レジト、思儲マウケテゾ出ラレケル」で道行となる。

……憂^{ウレ}ヲバ留^{トド}ヌ相坂^{ソウザカ}ノ、関^{セキ}ノ清水^{シズミ}ニ袖濡^{スレ}テ、末^{ハル}ハ山路^{カニ}ヲ打出^{ヌキ}ノ浜^カ、沖^{ナミ}ヲ遙^{ハル}見渡^{ミワタ}セバ、塩ナラヌ海^{ウミ}ニコガレ行^{ユク}、身^ミヲ浮舟^{ウキフネ}ノ浮沈^{ウキシヅム}ミ、駒^{ウマ}モ轟^{トドロ}踏鳴^{フミナリ}ス、勢多^{セタ}ノ長橋^{ナガハシ}打渡^{ウチワタリ}リ、行向^{ユキカ}フ人^{ヒト}ニ近江^{アワミ}路^{ミチ}ヤ、世^ヨノウネノ野^ノニ鳴鶴^{ナガヅル}モ、子^コヲ思^{オモフ}カト哀^{アレ}也^{ナリ}。時雨^{シゲレ}モイタク森山^{モリヤマ}ノ、木下^{コノシタ}露^{ツキ}ニ袖^{スベ}ヌレテ、風^{カゼ}ニ露散^{シロハラ}ル篠原^{シノハラ}ヤ、篠分^{シノワタ}ル道^{ミチ}ヲ過行^{スギユケ}バ、鏡^{カガミ}ノ山^{ヤマ}ハ有^{アル}トテモ、泪^{ナミダ}ニ曇^{クモ}リテ見^ミヘ分^ワズ。物^{モノ}ヲ思^{オモフ}ヘバ夜間^{ヨア}ニモ、老蘇^{オウソノモリ}森^{モリ}ノ下草^{ゲクサ}ニ、駒^{ウマ}ヲ止^{トドメ}テ顧^{フル}ル、古郷^{フルサト}ヲ雲^{クモ}ヤ隔^ヘツラン。番場^{バンバ}、醒井^{サメガキ}、柏原^{カシハラ}、不破^{セキヤ}ノ関屋^{セキヤ}ハ荒果^{ハハチ}テ、猶^{ナホ}モル物^{モノ}ハ秋^{アキ}ノ雨^{アメ}ノ、イツカ我身^{ワタシ}ノ尾張^{オウザ}ナル、熱田^{ネツタ}ノ八劍^{ヤツルギ}伏拝^{フシハイ}ミ、塩干^{シホカ}ニ今^{イマ}ヤ鳴海^{ナルミ}渦^{ガタ}、傾^{カガフ}ク月^{ツキ}ニ道見^{ミチミ}ヘテ、明^{アカ}ヌ暮^クヌト行道^{ユカミチ}ノ、末^ハハイヅクト遠江^{トホタヱ}。浜名^{ハマナ}ノ橋^{ハシ}ノ夕塩^{ユフシホ}ニ、引人^{ヒキヒト}モ無^{ナシ}キ捨小舟^{シテコボネ}、沈^{シヅム}ミハテヌル身^ミニシアレバ、誰^{タレ}カ哀^{アレ}ト夕暮^{ユフク}ノ、入逢^{イニホ}鳴^{ナリ}バ今^{イマ}ハトテ、池田^{イケダ}ノ宿^{ヤド}ニ着^{ツキ}給^{タマフ}フ。……

逢坂山を越えてから池田の宿に着くまでの地名が連らねられて、それが道中をあらわすようになっているが、もちろんこれは地理の説明としてではない。しかもこの行間に漂うはなやかな物悲しさは、前後の文章と相まって、悲劇の進行を人々に伝えているといえよう。

ところで、ここに連らなる地名が歌枕なのである。相坂ノ関・打出ノ浜・勢多ノ長橋・ウネノ野・森山・篠原・鏡ノ山・老蘇ノ森・不破ノ関・鳴海渦・浜名ノ橋と、それはあたかも、土地土地

の国魂が次々と勧請されていくかのごとき感がある。しかも道行の文章は、これら歌枕の證歌に沿って作られている。これを説明すれば

「相坂ノ、関ノ清水ニ袖濡レテ」は『拾遺集』にある紀貫之の歌

あふ坂の関の清水にかけ見えていまや引くらむ望月の駒

一七〇

さらに『後拾遺集』にある白河天皇の歌

逢坂の名をも頼まし恋すればせきの清水に袖もぬれけり

六三二

を證歌とする。「ウネノ野ニ鳴鶴モ」は『古今集』の大歌所御歌

近江より朝立ちくればうねの野に鶴ぞ鳴く^{たづ}なる明けぬこの夜は

一〇七一

「時雨モイタク森山ノ、木下露ニ」は『古今集』の紀貫之の歌（森山^{したば}もる山）

白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり

二六〇

「鏡ノ山ハ有トテモ、泪ニ曇リテ見ヘ分ズ」は『古今集』の伴黒主の歌

近江のや鏡の山を立てたればかねてぞ見ゆる君が千年は

一〇八六

「不破ノ関屋ハ荒果テ」は『新古今集』の摂政太政大臣藤原良経の歌

人すまぬ不破の関屋の板びさし荒れにし後はただ秋の風

一五九九

「塩干ニ今や鳴海渦、傾ク月ニ道見ヘテ」は『新古今集』の正三位季能の歌

さ夜千鳥声こそ近くなるみ渦かたぶく月に汐や満つらむ

六四八

が證歌である。すなわち『太平記』のこの道行文は、ここにあげた證歌をはじめとする文学的な背景によって独得のイメージを持つ歌枕を羅列することによって、物悲しさを漂わせることに成功している、といえよう。

しかも今『太平記』を例にあげたのは、この軍記が室町期より物語僧によって人々に語られ、近世から明治にかけても「太平記読み」といわれる専門の語り手がいたほど、多くの人に人気があったからであった。文字を読めぬ人々にも知られていた『太平記』の大衆性は、当然ここに連なる歌枕の大衆性に重なっていくといえよう。したがって、上田秋成が『雨月物語』の「白峰」で地名を羅列しても、それは決して独りよがりではなく、読者に一定の情緒を感得させえたのであった。

今日でも、この歌枕はきわめてポピュラーな世界に生きている。たとえば大相撲の年寄名「鏡山」(元横綱柏戸が襲名)は先引道行文の「鏡ノ山」を思いださせてくれるし、春日野・二子山・宮城野・美保関・片男波などの年寄名も、著名な歌枕そのものである。このような例は他にもあろう。

それにしても、日本人はなぜ特定の地名をどのような立場からえらんだのであろうか。そのうえ、

なぜその地名に固有のイメージを培養しつづけてきたのであろうか。その地名がなぜ和歌をはじめ散文にまで深くかわり、平安時代から近世にいたるまで広く文芸の世界で大きな意味を持っていたのであろうか。

これらの疑問は、いいかえれば歌枕が、ここで略述したような旅と文芸とのかかわりだけでは到底とらえきれない、広く深い基盤に根をおろしていることを暗示しているともいえよう。そしてこの間に正面から答えるまでには、研究は進んでいないのが現状である。本書が意図したものは、したがって普遍につくよりもまずはできるだけ具体的に即し、一つ一つの事実の中で、歌枕についてのさまざまな様相を考えてみることであった。それらの積み重ねが、やがては歌枕の全体像を解く道へとつながる一方途と思うからである。